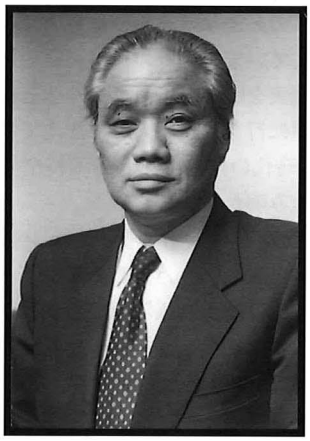
追悼

松村 秩氏を偲んで

福屋靖子（法政大学現代福祉学部）



人生の大半を理学療法士界に捧げられ，これからご自分の人生をという時の早過ぎたご逝去はどんなにか心残りであったことか，とりわけご家族を思うと心痛の極みである．

松村 秩氏はわが国理学療法士界の第一人者であり，日本理学療法士協会の創設者の一人である．理学療法士の身分法は，リハビリテーション医療の必要性を訴え続けた篤志家医師達の努力を背景に昭和40年に発足したが，松村氏は米国人教師による国際的レベルの教育を受けた東京病院附属リハビリテーション学院の第一期生であった．私が松村氏に出会った最初は勤務先の東大病院である．当時ローソン氏が指導教員として派遣されており，彼は実習生の中で最も印象に残っている学生であった．実直・真摯で実行力のある学生という印象で，額に汗して患者と対している姿が目に焼き付いている．その後，当時唯一の専門誌であった「理学療法と作業療法」の編集委員会や彼が協会長となった理事会などで一緒に仕事をする機会に恵まれた．

制度化されたとはいえまだ実態のないわが国の理学療法や専門家集団としての協会において，松村氏は嵐の海の羅針盤の役割を果たした人物である．つまり，協会の方向に一定の道筋が定まるまでの孤高の戦いは，周囲には計りしれないほどの試練であったものと推測される．松村氏はプロとしての揺るがぬアイデンティティを持ち，それをわが国に根付かせる強い使命感のもとで努力され，昭和56年には世界理学療法連盟の常任理事国として承認されるという快挙を協会長として成し遂げた．この困難な課題を乗り越え土台をつくり後輩にバトンタッチできたのは，彼の誠実な人柄と忍耐力に負っており，彼の功績がなければ理学療法士の現在はなかったと確信している．

われわれは決して忘れてはならない彼の功績に感謝し，それに報いるべく社会貢献できる理学療法を目指していくことを誓いたい．

「松村さん，本当にありがとうございました．心よりご冥福をお祈り申し上げます．」

〔ご略歴〕

昭和7年3月17日生
昭和35年3月　立命館大学文学部史学科卒業
昭和41年3月　国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院理学療法学部卒業
昭和41年5月　理学療法士免許取得　第10004
昭和43年6月　ボストン大学大学院理学療法学科修了

昭和41年4月　国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院理学療法学部教官（昭和45年2月～48年同学部長）
昭和48年5月　東京都養育院附属病院リハビリテーション部主任技術員
昭和53年9月　同理学療法科長（昭和61年3月まで）
昭和58年6月　同作業療法科長兼務（昭和61年3月まで）
昭和61年4月　東京都立医療技術短期大学理学療法学科教授（平成5年7月～7年3月同学科長）
平成7年4月　茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科教授（平成11年4月～13年3月同学科長）
平成13年4月　日本工学院専門学校医療学部参与

平成14年7月13日　ご逝去（享年70歳）

〔社会的活動〕

日本理学療法士協会創立に参与（昭和41年）/日本理学療法士協会会長（昭和46年まで1期，昭和49～平成元年）/協会準機関誌「理学療法と作業療法」編集委員（昭和42年～）/理学療法士・作業療法士国家試験委員（昭和45～55年）/国際理学療法連盟理事としての日本代表委員（昭和49年）/日本義肢装具研究会理事（昭和53～60年）/厚生省医療関係者審議会委員に理学療法士として初めて就任（昭和55年）/国際リハビリテーション交流セミナー委員会委員（昭和56年）/日本義肢装具学会理事（昭和60～平成4年）/中華人民共和国身体障害者リハビリテーションセンターへJICAから派遣（昭和62年）/第3回アジア理学療法学会・総会学会長（昭和63年）/厚生大臣表彰（国民医療の向上，昭和61年）

業　績　『ねたきり老人の介助』（医歯薬出版，1982年），『やさしい老人のリハビリテーション』（中央法規出版，1984年）など著書多数

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/08 06:29:42